



Title	輸出向彫刻家具（1890-1930）について：ウラジオストク市での調査を中心に
Author(s)	門田, 園子
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 130-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53451
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

輸出向彫刻家具（1890-1930）について —— ウラジオストク市での調査を中心に ——

門田園子／埼玉大学非常勤講師

本発表では、発表者が2010年意匠学会大会シンポジウム「横浜デザインを考える」で紹介した横浜発輸出向け彫刻家具について、その後極東ロシア、ウラジオストク市で行った調査を中心に、考察した。「彫刻家具」とは、イチイ、ケヤキ、ホオ、サクラ、カツラなどの日本産木材に、深彫りで花や鳥、雲や龍といった東洋的な意匠を凝らした西洋式の家具で、1890年代前後から1930年頃まで、横浜を中心に製作、輸出されていた。製作は分業で、まず男性の彫り師が、北海道から仕入れた木材を製作所で引き割り、工場で小割し、組み合わせた後で手彫りした。彫刻は荒く彫ったのち、細かく削っていく。これを女工を含む塗り師が、のみ目が消えるまで磨き上げ、国内産あるいは中国産の漆やワニスを塗って仕上げていた。芝山細工師や象嵌師がこれに加わることもあった。

家具室内装飾史のなかでも特異な表象といえる彫刻家具の意匠が生み出された要因は、次の三点が挙げられる。一点目は、彫刻家具が明治中期から昭和初期という時期のわずか40年間のみ製作されていたこと、二点目は、初期には宮彫り師が製作の担い手の中心にいたこと、三点目は、彫刻家具はほぼ100パーセント海外への輸出向けであったことである。つまり、明治維新以降の急速な近代化、殖産興業下の日本で、新たな需要に向けて製作をシフトした伝統工芸職人がおり、工芸が主要輸出産業として奨励されるという国の政策があったからこそ、いわゆる「エキゾチシズム」を駆り立てるかのようなデザインが誕生し、また時代の移り変わりとともに忘れ去ら

れていったといえる。

彫刻家具が国内で開かれた勸業博覧会に出品されたことはなかったが、海外の博覧会では1904年のセントルイス万国博覧会を皮切りに、1910年日英博覧会、1915年パナマ万国博覧会、1926年フィラデルフィア万国博覧会に出品、金賞や銀賞を授賞した。

また横浜のみならず、東京、日光、大阪でも類似の家具が制作されていた。大阪の山中商会が製作していた彫刻家具は、極彩色の塗り、多様なスタイルの引用、皮張りや金唐皮の椅子張りなど、横浜生産のものとの違いがある。山中の彫刻家具は、春日スタイルや、法隆寺スタイルなどの名称がつけられていることから、日本の歴史にルーツをたどったナショナルアイデンティティの現れた作品といえる。これに対してウラジオストク市に残る横浜製の彫刻家具は、日本的というよりは西洋からみた東洋的なデザインを反映している。

ウラジオストク市の彫刻家具については、2010年8月、現地での調査の結果、沿海州美術館及び別館に19点、アルセニエフ博物館に1点、ゴーリキ劇場に7点、ソログープ家に2点の彫刻家具が確認できた。家具の意匠は、カプリオールレグに、植物文様（桜、竹、梅、菖蒲、菊、蓮、葡萄、蔦、唐草）、動物文様（龍、鳥、獣頭、蝙蝠）、自然文様（雲）、幾何学文様（菱文、家紋、雷文）などが巧みに施されているのが、全体の特徴といえる。これらの特徴は、明治期に職人の見本録として全国に配布された1875年刊行の『温知図録』ですでに例示されている。

ウラジオストクに残る家具のほとんどは、1890年代から1922年までの日本人が多く居留していた時代に渡ったものである。来歴はそれぞれ、戦前は極東一の商社といわれ、日本や中国にも支社のあったドイツ系商社クンスト・イ・アルベルスで購入されたもの（「ウラジオストク」新聞初代編集長ニコライ・ソログープ家所蔵）、1894年から1930年にかけてウラジオストク市に暮らしていたアメリカ人女性エレノア・プレイが所蔵していたもの（アルセニエフ博物館所蔵）、1929年に旧ソ連時代の軍事施設や共産党委員会に寄贈され、1966年に美術館開館時に館所蔵になったもの（沿海州美術館所蔵）、1946年に満州経由で渡ったもの（ゴーリキ劇場所蔵）と多岐にわたっている。

発表者はウラジオストク市に残る家具を横浜製としたが、彫刻家具は他国でも生産されていた可能性がある。クリスティーズ・ロンドンのオークションでは「中国製の彫刻小円卓一対」として出品されている例がある。また、「アングロ・インディアン彫刻椅子」のように、花鳥木が彫られたカブリオール脚など日本で生産されていた彫刻家具と共通項があるものの、流れるような彫り、表面仕上げにウラジオストク市の家具との明らかな違いがみられる例もあり、東アジアにとどまらない彫刻家具の流通を示唆する作品も残っている。さらに、インドのハイデラバードにあるサーラル・ジャング博物館〔Salar Jung Museum〕所蔵の彫刻家具は、躍動のかつ空想に富んだデザインで、横浜の家具に範を取っているものの、明らかな相違は無視できない。中国を超え、大英帝国下のインドでの意匠の変容については、今後さらなる調査を進めていきたい。

彫刻家具が1930年代初頭には生産されなくなった理由は、関東大震災でダメージを受け、

世界恐慌で販売が鈍ったことが直接的原因だといわれているが、流行の下火、つまりは海外の需要に合わなくなったこともまた主要な要因となった。バロック的であり、装飾過多な彫刻家具は、東と西の出会いの衝撃という時代背景に合致した特殊な表象であったため、そのショックが緩和され、次第に目の肥えてきた外国人には飽きられていく運命にあったといえよう。

今後の課題として、彫刻家具の大陸への広がり、彫刻家具以前以後の家具を中心とした室内装飾の東洋趣味について、さらなる研究を進めていきたい。



図 沿海州美術館所蔵彫刻家具（2010年8月13日 沿海州美術館撮影提供）